

昔むかし、神さまが、おじいさんのすがたで、地上を旅しておられたときのことです。

あるところに、三人の兄弟がいました。とても貧しかったので、いつも食べる物がありませんでした。とうとう、一番下の弟が、家から出て行くことになりました。

若者は、人に食べ物をめぐんでもらいながら、あちこち歩いて行きました。すると、ひとりのおじいさんに会いました。おじいさんは、

「一緒に行かないか。そのほうが楽しいだろうから」といいました。そこで、若者は、おじいさんといっしょに歩いて行きました。

歩いているうちに、ふたりはお腹がへって、つかれてきました。そこで、腰をおろして休むことにしました。おじいさんは、ふくろの中からパンをふたつ取り出すと、ひとつは自分が取り、もうひとつは若者にやりました。そして、自分の分を食べてしまうと、横になって眠ってしまいました。

若者は、おじいさんが寝こんだのを見ると、ふくろの中からさらにふたつ、パンをこっそり取り出して食べてしまいました。

やがて、おじいさんは目をさまして、若者がのこりのふたつのパンを食べてしまったことに気づきました。ふたりは旅をつづけましたが、歩きながら、おじいさんは聞きました。

「なあ、わしは、パンをもうふたつ持っていたんだが、いま見るとなくなってるんだ。ひよっとして、おまえが取ったんじゃないか」

「とんでもない。おれじゃない」と、若者は答えました。

「それならいい」とおじいさんはいいました。ふたりは、さらに道を進んでいきました。

やがて、大きな湖に着きました。おじいさんは、湖の周りを歩いて遠回りしたくなかったので、まっすぐ湖に向かって行って、水の上を歩きはじめました。若者も水に入って行きましたが、だんだんしずんでいっておぼれそうになりました。若者は、

「助けてくれ！」とさげびました。

おじいさんは、ふり返ると、若者にいいました。

「ひよっとして、おまえがパンをふたつ食べたんじゃないか」

「とんでもない。おれじゃない」

「それならいい」とおじいさんはいいました。そして、手をさしのべて、若者を助けてやりました。

ふたりは、湖を渡って、さらに進んでいきました。すると、炎が燃えさかっている野原に來ま

した。おじいさんは、平気で炎の中を通りぬけました。若者も炎の中を通りぬけようとしたが、やがて服が焼けはじめ、どんどん体が熱くなってきました。

「助けてくれ！」と、若者はさげびました。おじいさんは、もう一度たずねました。

「ひよつとして、おまえがパンをふたつ食べたんじゃないか」

「とんでもない。おれじゃない」と、若者は答えました。

「それならいい」とおじいさんはいって、火を消してやりました。

そうこうするうちに、ふたりは大きな農場に着きました。そこには、金持ちの領主が住んでいて、ひとり娘が、たった今、病気で亡くなったところでした。領主は、

「もしも、娘を生き返らせてくれる者がいたら、わたしの全財産をやってもいい」といって、嘆き悲しんでいました。おじいさんは、領主をなぐさめていました。

「お泣きなさいますな。わしが、娘さんを生き返らせてあげましょう」

領主は、たいそうよろこんで、

「全財産でもなんでも、あんたが望むものはなんでもあげよう。だから、娘を生き返らせてくれ」といいました。おじいさんは、

「たくさんはいりません。ただ、お金をひと山くだされば、それでじゅうぶんです」といいました。そして、娘に近づいて、娘のからだの上で、つえを動かしました。それから、娘のからだを、手でそっとさわりました。たちまち、娘は目をあけて立ち上がりました。

領主は、大よろこびで、お金をひと山、おじいさんにくれました。

ふたりは旅をつづけました。しばらく行ったところで、おじいさんは、

「さあ、ふたりで山分けにしよう」といって、さっきのお金を三つに分けました。若者は、おどろいて、

「どうして三つに分けたんだい。おれたちは、ふたりしかいないじゃないか」といいました。おじいさんは、

「ひとつはわしのものだ。もうひとつはおまえのだ」と答えました。

「それじゃ、三つめのは、だれのぶんだい」

「三つめのは、パンを食べてしまったやつのだ」

若者は、とびあがって、三つめのお金の山をつかんでさげびました。

「おれ、おれだ！パンを食べたのはおれだ！」

おじいさんはいいました。

「二度と、そんなことをするんじゃないよ。わしは、これから、おまえと離れて自分の道に行く。おまえは、おまえの道を行きなさい。そして、二度と盗んではいけない。もし盗んでしまったら、

正直ただよしにまいりだよ」

おじいさんは、そういつて、行ってしまいました。

おしまい。

村上郁再話

資料 『世界の民話33リトアニア』 鬼頭恵美子訳／ぎょうせい